

沖縄県版の理科教科書を作ったらいかがでしょうか（上）

沖縄県がさらに自立と発展をするためには、現在の理科教育のあり方を見直したほうが良いと考えています。学術面もですが、産業の振興のためには科学の情報が必要ですし、科学的な思考を身につけていることも重要です。これらの基礎となる理科教育に問題がありそうです。中学生になるまでの教育がとりわけ重要と考えており、ここでは小学生が使う生活科と理科の教科書について述べます。

現行の生活科・理科教科書 沖縄県には教科書採択地区が6つありますが、生活科（理科と社会科を合わせたような教科で、1，2年生が学びます）では学校図書の教科書が3つの採択地区、日本文教出版、啓林館、東京書籍の教科書がそれぞれ1つの採択地区で使われています。学校図書1年生用（上）教科書には宜野湾市の家庭が10ページの全面で取り上げられていますが、これは異例です。資料には、ゲットウとカンヒザクラの写真もあります。2年生用（下）には沖縄都市モノレールと沖縄市立図書館の移動図書館の写真が載っています。他の教科書と比べて、圧倒的に沖縄県関連の写真、記載が多いと言え、これが宜野湾市を含む3採択の大きな理由でしょう。日本文教出版の1年生用には宮古島市の海の写真が2枚掲載され、1枚は2ページにわたっています。3年生からの理科では、国頭地区で啓林館の、他の5地区で東京書籍の教科書が使われています。前者では、4年でちゅら海水族館、5年で塩川（本部町）、6年で湾曲地層（名護市）、板状岩石（大宜味村）等の記載と写真があり、これらが国頭地区での採択と関係しているようです。東京書籍での沖縄関連の記載は多くはありません。むしろ採択されていない学校図書の教科書の方が多く、見開き2ページ（4年）のように目を引くものがあります。前記のような地域関連の記載と教科書選択の結びつきは全国の都道府県でも頻繁に見られます。沖縄県全般としては、地域関連の記載が多い教科書とそれほど多くないものが使われていると言えます。

沖縄県版の理科教科書を作ったらいかがでしょうか（下）

教科書での野生生物 前回は地域関連の記載と教科書選択の結びつきについて述べましたが、今回は野生生物について述べます。野生生物の分布は日本の南から北では大きく異なり、地域によって見ることのできる種類は異なります。小学校理科の教科書に記載されている野生生物の分布を八重山、沖縄・奄美、九州、中国・四国等の地区で調べ、それぞれの地区で見られる割合を比べると、近畿、関東の児童は記載されている野生種のほぼ全てを各々の地区で観察できる一方、沖縄と北海道の児童はかなりの種類を各々の地区で観察できないことが分かります。まだ未調査の教科書もありますが、全て

の教科書でこれが当てはまりそうです。信濃教育出版部の教科書は長野県内の全ての採択地区で使われ、他県での採択が皆無という特異な教科書ですが、記載されている野生生物の全てが長野県で観察できます。

沖縄県版生活科・理科教科書 児童が教科書に接した際に、自身が身近に感じる地名等（山・川、施設）、また身近な野生生物が多く載っていると親近感が湧き、興味を維持しやすくなります。飛騨山脈、長良川（東京書籍の教科書に記載）で学ぶよりも与那覇岳、仲間川で学ぶ方が学習効果が高まると考えられます。近隣の山川の記載は両親・祖父母等の保護者からの具体的な情報も得られ、家庭内での会話も生まれやすくなるでしょう。身近な地名への親近感から、また生物分布から沖縄県版の生活科、理科の教科書を作ったらいかがでしょうか。沖縄県版の作成に際しては、既存の教科書を基にした場合、生物、地学（気象を含む）に関連した分野、学習課題に関連した施設（風力発電施設等）の変更ですみます。写真の変更とそれに沿った記述で対応できます。子供たちが地域について知識を深め、誇りを持つことが沖縄県のさらなる自立に必須と信じてますが、このためにも県内の地名・施設、在来生物を多数、教科書に載せるべきでしょう。さらに、沖縄県の教職員が教科書作成に直接に参加することによって、様々な利点も期待されます。